

シリーズ対談 教養としての研究留学

第5回 矢倉 英隆

聞き手：島岡 要(三重大大学教授)

○島岡 今回は矢倉英隆先生をお迎えしてお話を伺います。矢倉先生は2007年まで東京都神経科学総合研究所（現・東京都医学総合研究所）でPIとして免疫の研究に従事された後、なんと60歳の時にフランスのパリ大学大学院に留学され、現在、科学哲学を専攻されています。その特異な経歴と幅広い学識から、「医学のあゆみ」でのエッセイの連載やサイエンスカフェの開催など積極的な情報発信もされています。でははじめに現在のパリへ留学されるに至った経緯を教えてくださいませんか。

■永久に生きる？

○矢倉 まず、これはみなさんに笑われるのですが、それまでは自分は“永久に生きる”とっていましたね。

○島岡 永久に生きる……それは言葉どおりの意味ですか？

○矢倉 そうです。“自分は死なない”とっていました。そういう考えの下での研究というのは、何か疑問が出てきたらそれに対して答えを出し、出てきた答えを基にまた新たな問題を設定し、それを永遠に繰り返していけばいつかは原理のようなものに辿り着くのではないかというものになります。深く考えることもなく、そう思っていたわけです。もともと私が研究に求めていたものは、原理的なものや美しいものを見てみたいということでした。ところが退職が近づいてきて、研究の時間が自分の意思とは別に物理的に切断されることがわかった時、自分の生存も同じであることに初めて気付くわけです。随分と遅い気付きでしたが、振り返ってみると、それがその後の「こと」の初めのように思います。

○島岡 先生が退職されたのは何歳の時でしょうか。

○矢倉 59歳です。

○島岡 定年退職が近づくにつれて自然とそういった認識を持たれたのです

か？

○矢倉 定年の2年前のある日突然です。終わりがあるとないとでは、全く意識が変わってきたのです。終わるということを意識できるようになると、この世から消える前にやっておきたいことは何かと考えるようになりました。その時に浮かんできた一つのイメージがありまして、頭の中が天空のように広がり、それまで研究で使っていた頭の領域が出てきましたが、それがものすごく狭かったのに驚いたわけです。研究をやっている時には頭全体が研究の世界だったはずなのですが、そこから徐々に抜け出していく時期になると、研究の領域がどんどん狭くなって、その時のイメージで言えば5%ぐらいでしたね。つまり、それまでは残りの95%は全然使っていなかったということに気付いたわけです。定年の後も仕事を続けるということは、その狭い世界をさらに掘り進むことになると思いましたが、それで果たして命が終わる時に満足できるかということを考えて、これからは頭のすべてを使ってみたいということになったわけです。

○島岡 研究されていた当時は、とにかく研究一筋という感じだったのですね。

○矢倉 とにかく研究をすべての中心に置いてやっていました。ところが定年を目前に迫ってくるようになって、これからの生き方を考えた時にどういう道が自分に一番しっくり来るのかということで模索し始めました。

○島岡 そのときは具体的にどういう選択肢を考えられたのでしょうか。

○矢倉 1つは、別のところで研究を続ける。もう1つは、大学で教えるというオプションもありました。そして3つ目は、その数年前からフランス語を齧り始めていたこともあって、日本を離れてフランスで自由な時間のすべてを使ってこの世界について考えてみたいということがありました。まず、研究を続けながら、あるいは大学で教えながら哲学をするというのは、集中力がそちらにいてしまいますから、残りの時間で哲学をするのは相当な無理がかかると考えて、最終的にはすべての時間を使って自由に考えられる方がいいということになって、3つめのオプションを選びました。調べてみると、ビザの問題があって何もしないでフランスにいるということは難しく、仕事をするか、学生になるかしなければ長期はられないことがわかりました。私の場合は全く束縛のないところで考えてみたいということがありましたから、哲学科の学生しかないということになりました。

■パリの文系大学院へ

○矢倉 今度は受け入れてくれるところを探さなきゃならないということで、日本からフランスのめぼしい教授にメールを出したりしていろいろとアプローチしたのですが、彼らからは全く反応がなかったのですね (笑)。それで、これではどうしようもないと思って実際に向こうの大学に行って、学生として受け入れられるかどうかを訊いて回りました。結局3回くらいフランスに行ったこととなります。その時に1カ所だけ秘書がいて、「そんなに言うのだったら、あなたの履歴書を置いていきなさい」と言われて、履歴書を置いていったわけです。そうしたら、日本に帰って別の研究室に可能性がないかメールを書いているちょうどその時に、履歴書を置いてきたところの教授から「受け入れ可能なので興味の対象を知らせてください」というメールが届いて、書類を大学に提出した2カ月後に正式に入学が認められました。パリ第1大学パンテオン・ソルボンヌというところの哲学科に向かう2カ月前のことでした。

○島岡 フランスの大学院に入学するにはどういう学歴・資格や手続きなどが必要なのでしょうか？

○矢倉 これは日本の大学と同じだと思いますが、まずは指導教授を見つけることが必要です。あと語学的要件として、フランスの国民教育省がやっているDALF という試験があって、これは日本でも受けられるのですが、そのC1かC2をパスしていれば語学試験が免除になります。

○島岡 学歴に関しては、日本の大学を出ていれば問題ないのですね。

○矢倉 ええ。ただ、私の場合はおそらく科学哲学だから受け入れられたのだと思います。

○島岡 先生はMD-PhDでいらっしゃいますよね。

○矢倉 そうですが、私の場合はいわゆる哲学のバックグラウンドは全くありませんから、例えばカントを勉強するというような形而上学の教授に受け入れられたかどうかはわかりません。科学哲学自体がいまは科学的な専門知を取り入れようとしていますので、科学的なバックグラウンドをもった人は入りやすいと思います。

○島岡 年齢は、教授がOKと言えどくに問題ではないということですか。

○矢倉 OKなんですね。ほとんどの教授より私の方が年上ですので。ただ、東

洋人は多少若く見られますから、ある教授は私のキャリアがまだ残っていると思って「こんな時期に専門をやめて哲学に入って、日本に帰って職があるのか」と心配してくれましたね (笑)。

○島岡 学費や資金計画のことも、よければ教えてください。

○矢倉 学費は年間、200～300 ユーロですね。

○島岡 200～300 ユーロ!? 劇的に安いですね。

○矢倉 そうでなかったら、アメリカの大学のような感じだったら行ってはいですね。ですから、1/100 ですね。

○島岡 いまは、パリ市内に住んでおられるのですか。

○矢倉 パリに一番近い郊外のブローニュというところで、今の家賃は大体 1,000 ユーロで、あとは生活費ですが、本以外はたいしてかからないですね。個人的には、資金面についてはあまり真面目に考えていなくて、生活できなくなったら生活のレベルを落とせばいいという感じでしょうか。

○島岡 なるほど。自己資金でやっていらっしゃるということですね。

○矢倉 そうですね。最初は、向こうで研究室に出入りして研究をするとか、何かアルバイトをしようかなという気もあったのですが、実際に大学の生活が始まると、とてもそんな余裕はなかったですね。全く新しい領域をフランス語でやりますから、大波が押し寄せるような感じでした。

○島岡 日々の授業は、どういった感じですか？

○矢倉 マスターの1年目は4つくらいの必修科目があつて講義を受けます。そして、半期ごとに小論文や筆記、面接試験があります。また、1年のまとめとして50ページの論文を提出して、それを教授の前で発表・討論します。2年目になるとインタラクティブなディスカッションに入ってきて、それがずっとストレスでしたね。2年目は100ページの論文が義務付けられていました。

○島岡 マスターは基本的にはレクチャーとグループディスカッションで、ドクターになるともう少し自由になるのですか。

○矢倉 ドクターになると何もありませんね。フランスのせいではないかと疑っているのですが。

○島岡 とにかく自分で自由に問題設定して考えていくということですか。

○矢倉 そうですね。ですから、何をやっても、どういうふうにやってもいいのです。それをもとに、教授とのディスカッションはやりますが。一方で、ア

アメリカの大学のプログラムを見ていますと、マニュアルがかなりしっかりしているようです。先生の選び方からテーマの選び方、論文の書き方に至るまで。

○島岡 そうですね。米国のプログラムは体系化されていますね。

○矢倉 あれがフランスには全然ないですから、すごく自由な感じがします。ただし、私のような門外漢にとっては、やり方がわからないので最初はかなり苦労しました。しかし、終わってみると、その更地から考えるような体験が実に面白いものに見えました。アメリカの場合はものを考える時に“どこかへ向かうため”に考えているという印象があります。初めに大枠があってその枠の中で考えるので、それはある意味では考えていないことになります。何もないところから立ちあげるのが一番面白いところで、それがフランスの場合には感じられます。大げさに言うと、そこに自由に頭を使うという喜びのようなものを感じました。

○島岡 アメリカの自由とフランスの自由は全然違うということですね。アメリカの場合には選択肢は与えられているけれど、フランスの場合には選択肢さえもないということですか？

○矢倉 なかったですね。教授が言っていたのは、哲学をやるためには3つの要素が必要で、1つは好奇心、1つは時間（暇）、そして最も大事なのが自由とこのことでした。その教授は「フランスは自由の国だから哲学に向いている」とも言っていました。

■最初の留学：アメリカへ

○島岡 矢倉先生は研究者のキャリアの初期にアメリカに留学されていたとのことですが、そちらの留学についても教えていただけますか。

○矢倉 最初の留学は大学院の4年目の時、1976年でした。その時は北海道大学の病理学教室にいたのですが、アメリカに行かないかという話がありまして。

○島岡 大学院を卒業される前ですか。

○矢倉 そうです。ですから、まだ研究者として日本社会に根付く前にアメリカへ行ったことになります。それは私の中では大きなファクターになりましたね。

○島岡 どちらに行かれたのですか。

○矢倉 ボストンにあるダナ・ファーバーがん研究所（当時はシドニー・ファ

ーバーといいましたが) の立ち上がったばかりの研究室で、そこで2年間やりました。それからニューヨークのスローン・ケタリングがんセンターに5年いました。

○島岡 ダナ・ファーバーからスローン・ケタリングに移られた経緯を教えてください。

○矢倉 当時、ボストンとニューヨークの研究室は共同研究をしていましたが、ニューヨークの研究室で細胞免疫をやる研究者を探しているという話をボストンのボスが持ってきて、それで私が行くことになりました。

○島岡 プロモーション (キャリアアップ) でスローン・ケタリングに移られたのですね。

○矢倉 ええ。免疫遺伝学の研究室でしたので、細胞免疫の方を任されました。アメリカに移り住んだばかりの頃は英語もあまりうまくないし、アメリカ社会に対してもものすごく違和感があったのですが、2~3年くらい経った頃からようやく馴染むような感じが出てきました。それからはアメリカで生活することが気持ちよくなって、6年目から7年目にかけての最後の1年間は、アメリカ人になる思考実験をしていました。

○島岡 それは、グリーンカードをとるということですか。

○矢倉 グリーンカードはすでに持っていましたので、その時は国籍を変えることを考えていました。ですが、1年間考えて結局できなかったですね。

○島岡 詳しくお聞かせいただけますか。

○矢倉 実は、日本にいた時には、日本で暮らすこと、あるいは日本人であるということはそれほど重要じゃない、いつでも止められると思っていたわけです。ところがアメリカで暮らし始めると、当然のことながら自分が日本人であるということを深く意識せざるを得なくなりました。そういう状況の中でいざ国籍を捨てるということを真剣に考えると、日本的なつながりを捨てて、向こうでアイデンティティを含めたすべてをゼロから作り直さなければなりません。

○島岡 そうですね。

○矢倉 文化的にも、日本でよしとされていたことがアメリカでは全く逆で、例えば意見を発表するにしても、日本ではある程度控え目にすることが求められますが、欧米ではそれでは駄目ですね。常に何かを自分の言葉で発言しない

といけなくて、そういうことがものすごく疲れるようになるのですね。日本的なものが脳のずっと奥の方に押し潰されるような感覚が出てきて、文化的にすごく苦しくなる時がありました。

○島岡 アメリカの文化的なものに非常に魅力を感じられて国籍を変えるところまで考えられたけれども、それを深く理解するにしたがってその難しさも見えてきたという感じでしょうか。

○矢倉 そうですね。もともと私は研究を発展させるために行っていたというよりは、アメリカの社会に興味がありました。日本にいた時には、アメリカの表層しか見えていない状態だったわけです。実際に自分がアメリカで暮らしてみても、アメリカ文化が自分の深い部分に入り込んでくる時に起こる変化がかなり大きなものであることに気付いたことになります。

■ 留学とは“移動”であり“断絶”である

○島岡 先生の場合はアメリカ文化への興味があったということですが、もう少し具体的に教えていただけますか。

○矢倉 アメリカ文化のこともありますが、日本を外から見たいという気持ちの方が強かったです。それが先にあって、キャリアを成功させるというような意識は少なかったですね。というのは、わたしは北海道生まれ、北海道育ちなのですが、北海道というのは日本の中心から外れていますし、日本も世界から見ると辺境に当たるわけです。ですから、北海道の外から、あるいは日本の外から見てみたいという願望が強くありました。

○島岡 いつ頃からそういう考えをお持ちだったのでしょうか。

○矢倉 中学、高校あたりからでしょうか。それは考えてみると結局哲学の視点に近いんですね。今いるところを離れて、少し上から見てみようという。

○島岡 俯瞰的視野ということですね。

○矢倉 そうですね。ですから、最近の若い人が海外に行かなくなったと言われていますが、それは目の前の言わば末梢のところに追われてしまって、そういう視点を持ってない可能性があるわけで、残念なことだと思います。

○島岡 おっしゃるとおりですね。

○矢倉 留学はまさにそうですが、“移動する”ということが知的活動にとって非常に重要になります。古代ギリシャの時代から移動することと考えるという

ことはほとんど同義に捉えられていました。

○島岡 詳しく教えていただけますか。

○矢倉 古代ギリシャでは、劇場というのが非常に重要だったわけです。theatre ですね。ギリシャ語の *theôrein* という動詞は、劇場などの見世物に行き、そこで語ることなく只管観ること、より正確には、何かを観に行くために移動することを意味していました。さらに広げて考えると、われわれの存在とは無関係にそこに在るものを自分自身の目で観ることでした。彼らは、そこにすでに在るものを *phusis* と名付けたわけです。つまり、自然ですね。それをじっくり観察すること (*theôria*) から理論が出てくるわけです。これが、古代ギリシャ人が発見した人間の知性の一つのあり方なのですね。

○島岡 場所を変えて違う環境に行って、ものを注意深く見るというのは非常に重要で、留学にはその要素がかなりある、ということですね。

○矢倉 留学にはまさにそういうところがあって、情報をスクリーン越しに見ているのとは全然違ってきます。異文化に身を置くというのはそれだけで日常からの“断絶”を意味します。まったく何も考えずに流れている日常に亀裂が入るわけですから、自ずと自分の頭で考えるようになります。例えば、病気になるとか、私の場合には研究者としての定年がやってきて、さらに自分の生の終わりに気付くということも決定的な“断絶”ですね。それと、これはアメリカで気付いたことですが、以前の環境では抑えられていた自分の中の性質が顔を出して、驚くこともあります。

○島岡 意識的に“断絶”に直面する機会をつくるという意味で、留学は非常に有効な手段だということですね。

■リスクをとること、チャレンジすること

○島岡 失敗や挫折も“断絶”に近いところがあると思います。現代の日本の抱える問題のひとつは、失敗や挫折を許容しない空気感が蔓延し、われわれの世代もそうですがとくに若い人に、失敗することや挫折を極度に恐れるメンタリティーがあるように感じています。

○矢倉 おっしゃる通りですね。それとは別に、外の時間が長くなると、日本社会の中で人間が抑えられている、あるいは自ら抑えているように見えることが多くなります。アメリカにもフランスにもない自分の方から自らを抑えるメ

ンタリティーというのは、チャレンジする上でも抑制的に働くのではないかと感じることもあります。私の場合は、分岐点がある時には、結果的にですがリスクの高そうな方に行っていますね。

○島岡 それは若いときからですか？

○矢倉 そうですね。アメリカでボストンからニューヨークに移った時も日本からのオファーがありながら、結局アメリカに留まることにしたわけです。自分でリスクの高い方を選んだので、精神的にこたえることもありましたね。

○島岡 自分からあえてリスクをとるということですね。

○矢倉 結果的にリスクを取っていますね。アメリカで生活していた時に感じたのは、それまでに感じたことがないような知的な高揚感でした。その時は、知的にこれだけ充実している状況を離れたくないということがあってそういう決断をしました。私の場合、具体的な体の世界と精神や観念の世界に分けるとすれば、精神の方を重視してしまう傾向がありますね。しかし、それに関しては全く後悔してなくて、それがあったからこそどこにでも自由に入っていくところがあります。

○島岡 とくにチャレンジについては、若い人がキャリアを形成していくうえでとても重要な点だと思います。私の仮説は、「リスクを取ってチャレンジしてもほとんどの場合死ぬことはないし、たとえ失敗してもそこから学ぶことがある。したがって帰納法的に考えると、N 回目にチャレンジをすると、その N 回目に学んだことを利用して N+1 回目のチャレンジが少し楽になる。これを繰り返すことによって人は無限にチャレンジするサイクルを営むことができるようになる」。しかしこの“チャレンジのサイクル”を可能にする前提条件となるのは $N=0$ 、つまり経験がゼロのときに 1 回目のチャレンジを何が可能にするのか、ということです。先生の場合には、1 回目のチャレンジを可能にした理由やきっかけは何だったのでしょうか。

○矢倉 私の場合は先ほどお話ししたように、“外から日本を見たい”という強い気持ちが先にあって、その勢いで結果的に先ほどお話しした“断絶”に繋がったように思います。ただ、もし自分が世界の文化の中心に生まれていたら、外に出たいとか留学したいという気持ちになったかどうかはわからないとニューヨークにいる時に感じましたね。

○島岡 なるほど先生の場合は“外からみたい”という気持ちがあって、必ず

しも外からみることが断絶につながるという事前の認識はなかったのですね？

○矢倉 そうです。

○島岡 すなわち、期せずしてある非日常の状況に置かれることが“断絶”で、1回目のチャレンジを可能にするものは、それに直面せざるをえない状況そのものなのですね。

○矢倉 人間は“断絶”に直面した時に初めて自分の中を覗き込み、自分の気がつかない資質や能力、自分を特徴付けているものが見えてくるのですね。ソクラテスの言葉ではありませんが、人生に目的があるとすれば、自分をいかに発見するか、ということだと思います。それを容易にするのが断絶で、“日常”の中にいるとそれはなかなかできないですからね。

○島岡 それまでは自分の中にあるもの、内在するものは何なのかよくわからないけれども、それを引き出してくれるものが“断絶”である、と。“自分探し”という言葉が一時期流行していましたが、それは積極的にやるようなものではなくて、圧倒的な非日常の状況になれば自分を見つめざるを得なくなるのですね。

■教養とは

○島岡 この対談のテーマは“教養としての研究留学”ということで、先生にとって教養とは何なのかというところを伺っていきたいと思います。90年代に相次いで大学の教養部が廃止されましたが、最近になってあらためて設置される動きがあるなど、教養教育の重要性がここに来て見直されています。

○矢倉 私の中では“リベラル・アーツ (自由七科)”という言葉がしっくりきますね。私がちょうど大学に入った頃、R.M.ハッチンズ (Robert Maynard Hutchins) という30歳の若さでシカゴ大学総長に就いた人が書いた『偉大なる会話』(岩波書店)を読んだのですが、そこで言われていたのは“まず世界の古典を読む”ということでした。それは、古代ギリシャから人類が考えてきた遺産をもとにものを考える姿勢をつくるということですね。ですから、わたしの考える教養とは、人類の遺産をもとに領域を超えて考えることができる素養、ということになると思います。文系に入ってやっと人類が考えてきたことに直接触れるというか、昔の人の声を直接聞くということができているわけですが、有益なだけでなく贅沢な経験をしているように感じています。と同時に、自

分が考えるようなことは、われわれの祖先がすでに考えていることがわかりま
すね。

○島岡 “オリジナリティー幻想” とか “オリジナリティー原理主義” という
ものがあって、たとえば芸術をやっている人たちは、何をやっても過去の偉大
な作品の焼き直しにすぎないじゃないかというふうになんか批判されてしま
う。これは研究をする場合にもあてはまります。オリジナリティーが大事だ
という姿勢には異論はないかもしれませんが、ほんのわずかな新規性を誇張し
て “オリジナル” として売りこまない論文としては認められない面がありま
すが、それって真の意味でのオリジナルなの？ という懸念は残ります。

○矢倉 そういう面はありますね。私が感じているようなことや考えているこ
とは、大概どこかに書き残されています。ある意味では、そういった過去の遺
産の断片が自分の中にあるとも言えるわけですが、新規性があるとすれば、私
はそれを “くし刺しにする” と言っているのですが、過去のいろんな考え方を
いかに組み合わせるのか、その組み合わせ方にあるではないでしょうか。

○島岡 編集する能力や編集の仕方にオリジナリティーがあるということだ
すね。それはイノベーションの元々の意味である “新結合” ということにも近い
と思います。

■ “ぼんやりする” ことに慣れる

○島岡 教養について、この対談のテーマへのアンチテーゼにもなるのですが、
「研究者が教養とか哲学とかそういうことを言い出したらおしまい、若い
ちはそういうことを考えずにがむしゃらに仕事をしていくほうがキャリアにと
ってはいい」と考える人もいます。

○矢倉 特に関西の方にはそういう印象がありますが、偏見でしょうか。

○島岡 僕は関西なんです (笑)。それはもしかしたらある意味現実的なアドバ
イスかもしれないのですけれども、先生はどう思われますか？

○矢倉 私自身、現役時代はあまり考えないで追われるようにやってきたもの
ですから、それは間違いだとはなかなか言いづらいですね (笑)。がむしゃらに
やるのがいいという結論になったとすれば、それはそれでいいと思いますが、
問題はそういう考えがどこからどのようにして出てきたのかということですね。
ドイツ語で言う *Gedankengang* を説明できるのか、ということが問題になるの

だと思えます。

○島岡 若い人はとにかくがむしゃらにやったほうが良いとアドバイスするのは、恐らくその人も自分の先輩にそういう言われて、がむしゃらにやること以外の選択肢を知らずに今まで生きてきた。だからそういうアドバイスしかできないのではないのでしょうか。

○矢倉 そうかもしれないですね。ですから、そこでは誰も考えていないわけです。

○島岡 おっしゃるとおりですね。

○矢倉 それを考えるのがまさに哲学的な思考で、ものを考える時に過去の蓄積をできるだけ動員しながら今を考えるというやり方が求められるのだと思います。そうではなく、今その辺の人が言っていることだけをもとに考える場合には、思考の深さが違ってくるでしょうし、解の出方にも違いが出てくるのではないかと思います。私がこういうことを言うのは、昔の自分を分析して、過去の自分に対して言っているところがあるのですが。

○島岡 とにかく考えずにがむしゃらにやっとうまくいくというのは、高度成長期の一時期でだけですね。経済的に成長しない、ポストやポジションもふえない成熟時代になってきて、その高度成長期型モデルが様々な面でワークしなくなっています。そのような時代に矢倉先生が哲学の重要性を発信されていることはとてもタイムリーであると思います。そこで今の時代を生きている中堅から若手の人に対してメッセージを発するとしたら、どういうことが言えるのでしょうか。

○矢倉 それは“がむしゃらにやることを止める”ということでしょうか。ある哲学者が言っているのは、「ぼんやり眺めていることに慣れなさい」ということです。つまり、ぼんやりして「こと」の全体をそのまま受け入れるという態度ですね。あるいは、少し判断を先送りして“ものをためて見る”とでも形容すべき態度ですね。そういう時間を定期的にとると、がむしゃらにやっている時には見えないものが見えてくるかもしれません。

○島岡 “ぼんやりしていない”状態のひとつが“がむしゃら”ですが、消極的な“ぼんやりしていない”状態に“暇をつぶしてしまう”もあると思います。

○矢倉 私も現役の時は、暇ができたなら“どうしようかな”という感じだったのですが、今は全く違いますね。何もしていない時間が非常に重要で、そうい

う時は精神の運動に縛りがないので、何が出てくるのかわからないのがいいですね。瞑想を多くの宗教が取り入れていますね。私も自分で瞑想と称しているものをやるのですが、無の境地を目指すのではなく、ただ、何も考えないで、目をつぶってとにかく日の光に当たるのです。そうすると何かがどこからともなく浮かんできますので、それをどンドンたどっていくと今まで気がつかなかったことに気がつくことがありますね。これは研究者にも有効ではないかと思うことがあります。

■今をみつめる

○島岡 暇をもてあますことに対して病的なまでの“恐れ”が世の中にはあるように感じます。その“恐れ”につけ込んだ商品がスマートフォンです。多くの人が電車でもカフェでもいつも触っている姿を見ますが、あれは何をやっているかという暇つぶし (Time Killing)、つまり時間を殺しているわけです。そして暇をつぶすことにより、じつはクリエイティビティーの芽もつぶしているのではないかと心配しています。

○矢倉 そう思いますね。何もしない時間が非常に重要だというような認識は、私もフランスに行ってから出てきましたから、仕事をしている現代人はなかなかそういう考えにならないと思います。ですが、人間を根っこから精神的に安定させるためには、暇な時に自分の中から出てくるものを観察して、それを自分の過去と現在の中にあるものと繋げていくような精神運動をすることですね。それは、自分の全体を生かしているような感覚を引き出すだけではなく、先ほどお話したように新しいアイデアを生む切掛けになるかもしれません。

一般に、仕事をしている時は達成すべき目的というのは現在じゃなくて未来にありますから、現在というのはいつも完了してなくて、目的のために現在を使っているのですね。未来のために現在を犠牲にしているとも言えます。仕事をするというのはそういう状態で、アリストテレスはこれをデュナミス (*dunamis, dynamis*) とかキネーシス (*kinêsis*) と名付けています。これに対して、彼はエネルギー (*energeia*) という概念を創りました。こちらは、目的はもちろんあるのですが、それは今なのです。目的が今ということは、今何かをした時には「こと」は完了していて、常に満たされた状態にあるわけです。エネルギーという考え方に立てば、暇を潰すという考えは生まれてこな

いことになります。今が目的なのですから。

○島岡 現在の価値というのは未来（現在の先）にあるものではなくて、現在自身にあるということで すね。

○矢倉 昔よく“今を大切に”とか“今を生きる”という言葉を目にしましたが、ピンときませんでした。エネルギーという概念を知ることによって、私の中ではその意味がはっきりしてきました。何か目的が先にあって、そこに行くための時間として今があるのではないということですね。大げさに言うと、人生の目的は何かと問われれば、それは“今を生きる”ことだと答えることができると思います。¹

■ “しょせん” という視点を知っておく

○島岡 現代人の今を犠牲にするメンタリティーの根本には、“将来のために今は辛抱せよ”という学校教育があるように思います。ただそれは悪い面ばかりではなくて、若い未熟な人に今を生きろと教師が無邪気に教えると、生徒には非常に享樂的な生き方を肯定していると誤解して受け取られてしまう危険がある。“将来のために今は辛抱せよ”ということは享樂的・破滅的な行き方を予防するという意味で、社会の安定に寄与する面もあると思うのですが……。

○矢倉 やはり私の場合も“今が目的”いう考え方が身に付いたのは、仕事を止めて環境が変わってからですね。ただ、現役の人たちも実践できるかどうかは別にして、そういう価値観があるということを知っていることは重要だと思います。さらに、自由にものを考えるとはどういうことなのかとか、価値判断を含む専門を超えた問題をどう扱うのかというような根源的なことを考えることも大切だと思います。それはまさに哲学の領域です。哲学には人間の思考の枠を取り払う力があると思っていますので、閉塞感の中にあると言われる日本でも哲学教育が必要になるのではないのでしょうか。

○島岡 とくに研究者は、やはりひとつのことを極めるためにある時期、視野狭窄に陥らないとうまくいかない場合があるわけですが、そういう人にとっても先生のおっしゃるような“今を生きる”価値観や哲学的な視点があるということを経験の比較的早い時期に知っておくことが大事だということですね。

¹ このテーマについては“パリから見えるこの世界”第17回「アリストテレスのエネルギー、あるいはジュリアン・バーバーの時間」（医学のあゆみ 245 巻 10 号）で詳しく取り上げられています。

○矢倉 脇目もふらずにやるのもいいと思います。おそらく、そうしないとなかなか成功しないとも思います。振り返ってみますと、私は学生時代から現役の研究者の時期までは、あくまでも舞台の上での“芝居の時期”だという感じでいました。しかし、舞台での芝居が終わった後も人生はまだ続き、むしろそちらが大事だということも意識していましたから、そこまでエネルギーを持続させなければならない。追われるようにやっている一方で、いかにエネルギーをセーブしていくのかという意識がどこかにありましたね。

○島岡 いま矢倉先生がおっしゃった考え方に通じるところがあると思います。私は“ゲーム性”を知っていることが重要だと考えています。人生を本気でシリアスに考えるだけだと、一度負けたらそこで終わりと思ってしまう。ゲーム性を意識できていれば、いくらでもやり直しができると思えるから、うつになったり自殺を考えたりしないのですね。

○矢倉 “しょせん何々だ”という感じですね。

○島岡 そうですね。大学受験や医師国家試験、そして就職試験や教授選もゲーム性をもって“しょせん〇〇”と捉えられれば、ずいぶん楽になります。“しょせん”という言葉はとてもいい言葉だと思います。

■過去の意味は今によって変わる

○矢倉 “しょせん”という言葉と関係してくるかもしれませんが、私の経験では過去にすごく気分が高揚したことがあったとしても、気分が高揚したことは覚えていても、その高揚感を再現することはできないですね。肉体的にも精神的にも“あのよかった感じ”を再び味わおうとしても、もう一度体験することはできません。

○島岡 過去の成功や業績があるからいいやとはならないのですね。

○矢倉 すばらしい業績を上げて、その業績を思い出しながら生きるという人もいるのですが、私はできないですね。ということは、何が重要になるかという、今が一番高揚していることなのです。今が最高じゃなきゃ駄目で、その意味で私の理想は人生の最後にピークがくることですね。

○島岡 過去の失敗にとらわれないというのも大切だと思います。過去のことを後悔しても何も変わらないので、サンクコストとして忘れてしまうようなメンタリティーを持てると強いですね。

○矢倉 おっしゃる通りですね。それが成功か失敗かというのは、ある程度時間が経たないとわからないことが多いですからね。ですから、その時その時を必死にやっていたら、必ず後で何か違う面が見えて来る時があると思います。そういう意味ではすべての時間がその後の人生のためになるとも言えるのではないのでしょうか。

○島岡 まさにこの企画のテーマ、教養ですね。

○矢倉 ええ。要するに意味付けの問題で、過去の持っている意味が今の状況によって変わってくるのだと思います。私の場合、今フランスの空気が自分に合っているので、アメリカにいた時のことを“アメリカ文化に毒されていた”などと言うこともあるわけですが、当時の立場を再現すれば、今以上に異質な文化の刺激を受けていて、新しいところに精神が開かれていることを悦んでいたはずですが。今ではそれに対する評価が少し変わってきていますが、アメリカの経験がなければおそらくフランスには行っていませんね。それまでの自分の価値観に対するアンチテーゼになる見方を発見したので今があるわけで、もしアメリカ的なものを体験することなく最初からフランスに行っていたら、全然見方が違っていたと思います。むしろ今の時期にアメリカ文化に憧れていたかもしれませんし。

○島岡 なるほど。

○矢倉 ですから、過去の記憶を注意深く見て、今の状況と比較するような頭の使い方、ある意味では教養が求めていることでもあります。それができるとどんなことをやっても生きてくると思います。誰かにやらされているというのでは困りますが、自分の内なるモーターに従って選択したことであれば、後で必ず意味を持つてくるのではないのでしょうか。ただ、いつどんな意味を持つてくるかはわからないので、がむしゃらではなく、とにかく今に打ち込み、その時を辛抱強く待つこと。長い視点でものを見ることができるようになればいいですね。

(2013 年 3 月 28 日, 丸ビルコンファレンス スクエアにて収録)